

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 援助と先住民、リーダーシップ： メキシコ市のオトミー移住者の事例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 受田, 宏之, Ukeda, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1161">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1161</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 援助と先住民、リーダーシップ

—メキシコ市のオトミー移住者の事例—

受 田 宏 之

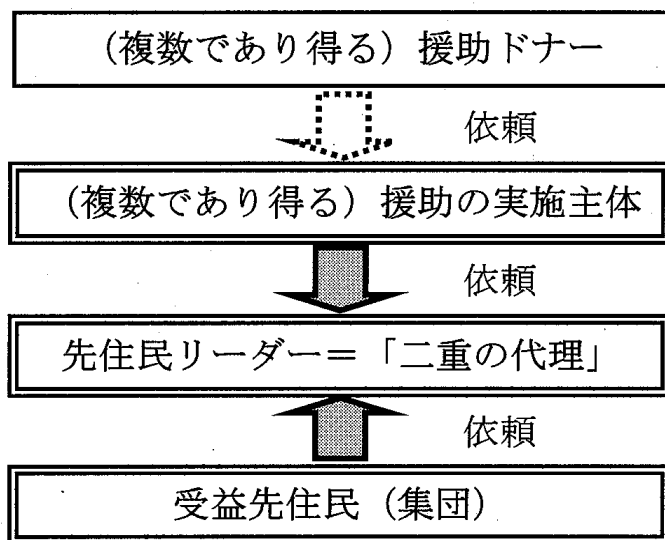
## はじめに—援助と先住民のリーダーシップ

人間開発から疎外されてきた先住民への援助活動は、先住民運動の隆盛とも結びつき、世界的に活発化している<sup>1)</sup>。先住民の多くは、彼らが文化の回復やルールの変更を求める運動に関与しているか否かを問わず、貧困ないし(先住民であるという)文化的特性ゆえに、外部主体による様々な援助活動の対象となっている。先住民研究においては、先住民運動を論じることがはやるようになった。しかし、その社会的重要性にもかかわらず、援助にかかわる外部主体と先住民との相互作用の実態を論じた実証研究は少ない。本稿の目的は、こうした現状を踏まえ、メキシコ市に住むオトミー(語族)移住者になされた援助活動の功罪を受益先住民のリーダーシップに焦点をあてつつ、論じることである。

先住民と援助を論じる際、リーダーシップは重要な変数である<sup>2)</sup>。第一に、援助を(供給)する側にとっては、異なる社会に属する受益者の中で「窓口」となる人物の存在は、援助の妥当性、効率性を高めるのに都合がよい。これに加え、援助サークルにおける近年の参加型開発論やエンパワーメント論の流行は、援助の手段としてだけでなく目的としても、受益者の組織化を望ましいと捉える傾向にある(佐藤 2003;2004; 佐藤編2005)。第二に、受益(需要)者である先住民にとっても、発達した政治組織を有する伝統的コミュニティが援助対象である場合のように、あらかじめリーダーが存在するときには、リーダーを経由し

て援助がなされるだろう。また、先住民への援助に特徴的な問題として、外部の援助主体とのやり取りに必要な言語能力や教育水準を備えた先住民の数がしばしば限られており、これら稀少な資源を有する人物が主導的な役割を果たすことが要請される、という事情がある。第三に、先住民の文化復興や自治を目標に含む先住民運動が盛んになっているが、そこでもリーダー、特に知的リーダーは決定的な役割を果たしている(Smith 1981; Favre 1998)。先住民運動をめぐる言説においては、統率力があり外部社会に自己主張をする強力なリーダーシップが想定されがちである。また、貧困削減プロジェクトなど、先住民運動とは直接関係のない援助でも、先住民が受益者である援助の実施過程では、先住民運動の存在と言説は意識されざるをえない。しかしながら、先住民運動を支えるようなリーダーシップは先住民の間であまねくみられるわけではない。先住民運動を率いるリーダー層も、多くの場合、政府やNGOなど外部主体から何らかの援助を受けている。援助主体と研究者は先住民のリーダーシップがいかなる条件下で育まれるのかを、謙虚に考える必要がある。資源と権力を有する援助主体が、参加型開発論や先住民運動に触発されて上から受益先住民の組織化を進めるとき、援助の停滞や受益者の内部対立、リーダーの政治ブローカー化など、予期せぬ効果をもたらさうる。

先住民のリーダーシップは、援助主体の方針、受益先住民の特徴に左右され、援助の結果に影響を与える。先住民への援助は、〈援助ドナー—援助の実施主体—先住民リーダー—リーダーが属する先住民受益者(集団)〉という複雑な利害関係者のチェーンを通じて行われる。このチェーンの中で、先住民リーダーは、先住民と外部の援助実施主体との仲介に努めるといって、「二重の代理」とでもいうべき難しい役割を演じる。すなわち、(複数でありうる)援助の実施主体はリーダーに受益先住民をまとめつつ、実施主体と円滑な意思疎通をはかることで援助活動の効果的な履行を期待(依頼)する一方、個々の受益先住民は代表者であるリーダーが自分達の利益を高めてくれること、公正に振るまうことを期待(依頼)する(図1)。



出所：筆者作成

図1 先住民への援助過程における  
依頼人—代理人関係

経済学の「依頼人(principal)－代理人(agent)」モデルを援助に適用した研究が指摘するように (Martens, Mummert, Murrell and Seabright 2002)、ここで、援助の実施主体、先住民リーダー、受益先住民の間に利害の一致がみられ、かつ、それぞれの性質と行動について情報が共有されているならば、三者が援助活動を通じて満足を得ることができるのであり、

リーダーシップは有効に機能しているとみなせるだろう。

だが、援助の現実においては、これらの条件が揃うことは少ない。利害の不一致や情報の非対称性が、援助実施主体とリーダーの間ないしリーダーと受益先住民の間で存在し、それが予期せぬ悪影響の発生も含め、援助に様々な問題をもたらすことになる<sup>3)</sup>。

先住民が政府・非政府の援助サークルの注目を集めており、一つの先住民集団が複数の主体から援助を受けることも珍しくないこと、さらには援助する側とされる側の社会的格差、距離が顕著であることから、先住民を対象とする援助活動においては、利害関係者の間でのすれ違いや相克が生じやすい。特に、異なる主体の「二重の代理」という立場におかれた先住民のリーダーシップを切り口とするとき、三つの論点に目を向ける必要がある。

第一の論点は、先住民リーダーは自身が属する受益集団と外部の援助主体との接点をなすが、その関係性のあり方である。受益先住民からの依頼という関係性が強い場合もあれば、援助実施主体との関係性の方が強固な場合もある。前者は「ボトム・アップ」型のリーダーシップと呼ぶことができるが、援助主体や知識層が建前上は好むあり様といえる。これに対して、後者では、援助の

実施主体が受益先住民の組織化を促す場合も含め、先住民リーダーの実質的な役割は援助主体が望む活動をスムーズに進めることにあり、リーダーシップは「トップ・ダウン」型とみなしうる。両者の区別は相対的なものであり、受益先住民のニーズの変化や学習を通じてリーダーシップのあり様も変容しうる。第二の論点は、先住民リーダーの資質、能力にかかわる。「二重の代理」であるリーダーの理想像は、外部の援助主体および内部の先住民双方の期待に応える人物である。だが、先住民の厳しい現実はこのような人物の存在を保証しない。ここで強調すべきは、リーダーの働きに対する援助主体側の評価と受益先住民側の評価が異なりうることである。

第三に、援助主体と先住民からの「依頼」に対してリーダーが得る「見返り(報酬)」は何かという問題も横たわる。先住民成員からも援助主体からもリーダーとしての貢献に対する金銭的報酬を受けない場合、仲間や援助主体の間で勝ち取る名誉や達成感が対価となりうる。だが、リーダーが貧困世帯に属するならば、金銭的見返りのない仕事に割けるエネルギーは限定的となる。リーダーが金銭的報酬を受ける場合には、受益先住民がそれを負担することもあれば、援助する側が供することもある。

このように、「二重の代理」という機能を果たすリーダーシップに焦点をあてることで、援助活動、とりわけ先住民という経済的には貧困下にあることが多く、外部社会との隔たりも大きな人々を対象とする援助活動が抱えがちな困難や矛盾を浮き彫りにし、改善に向けての政策含意を得ることができる。また、こうした作業には、リーダーシップや共同性を外から理想化しがちである、先住民をめぐる昨今の言説に注意を促すという意義もある。

本稿では具体的事例として、メキシコ市に住む、サンティアゴ・メスキティラン(以下SMと略記)出身のオトミー(*otomí*: オトミー語では *nãñho*)移住者になされた援助を取り上げる<sup>4)</sup>。スペインによる植民地期以前にメソアメリカ文明の繁栄を誇ったメキシコは、ラテンアメリカでも最大級の先住民人口を擁する国である<sup>5)</sup>。20世紀前半のメキシコ革命(1910~40年)以降、先住民の国民

統合、貧困削減ないし文化復興を目指す援助が、政府機関やNGO、知識人らにより行われるようになり、近年、活発化の様相をみせている。1970年代に登場した先住民運動も、1994年に南部チアパス州で武装蜂起したサパティスタ民族解放軍(EZLN)が先住民の自治を国内外に向けて説くようになって以来、勢いを増している<sup>6)</sup>。こうした文脈において、SM出身のオトミー移住者は、1) 都市に移住する先住民は増える趨勢にあるにもかかわらず、彼らを対象とする援助を論じた先行研究は殆ど存在しないこと<sup>7)</sup>、2) オトミー移住者は、メキシコ市の先住民の中で最も多くの援助を受けてきたエスニック集団の一つであり、援助活動の功罪を分析するのに格好の事例であること、3) 援助主体はオトミー受益者に組織の形成を促してきたが、複数あるオトミーの受益者組織は各々が独自性を示しつつもリーダーシップにまつわる困難や対立に直面していること、という三点において貴重な事例である。

## I サンティアゴ・メスキティトラン出身のオトミー移住者と援助活動

### 1. サンティアゴ・メスキティトランのオトミー

本稿が論じる先住民は、メキシコ市に住むSM出身のオトミー移住者である。オトミーは、降雨量の少ないメキシコ中央高原北部を伝統的な居住地とする、全国で6番目に話者人口の多い語族である<sup>8)</sup>。トウモロコシ耕作と少数の家畜飼育を組み合わせた家族農業を伝統的な生業とし、異なる家族は分散して居住する。その貧困およびメキシコ市など都市圏に近いことから、現在では先住民の中でも移住者の比重が高くなっている。

オトミー内でも属するコミュニティの歴史に応じて相違がみられるのだが、その中でSMは、面積約40km<sup>2</sup>、2000年に人口10,042人を数え、5歳以上人口の91.5%がオトミー語を話すという、ケレタロ州最大のオトミー・コミュニティである。16世紀からカトリックの布教上および行政上の単位として植民者により「先住民コミュニティ」と位置づけられていたSMでは、20世紀初頭までは付近の大農場での農業労働などを除いて、オトミーと外部社会との接触は限ら

れていた。メスチソ(非先住民)は、オトミーに対し差別的に振まう傾向にあった。しかし、メキシコ革命以降、面積を倍化させた農地改革に始まり、急速な人口増加に伴う農地細分化<sup>9)</sup>、先住民政策<sup>10)</sup>や教育政策・社会政策も含む様々な公共政策の実施、家族農業の限界の露呈、村外への(季節的、永続的)移住の増大、といった多次元に及ぶ変容を経験している。移住は、1947年の口蹄疫の発生に伴う家畜の喪失、1962年のSMを貫通する幹線道路の建設、という二つの出来事により後押しされた。70年代以降は次第に、永続的に都市部に移住するオトミーが増えるようになる。90年代後半以降には、米国に不法に出稼ぎに行くオトミーも急速に増加する。移住先でのオトミーの適応戦略を制約する重要な社会経済的特徴として、彼らの教育水準の低さを挙げることができる。若年層の間では改善がみられるが、SMの就学率と進学率は先住民の中でも低くなっている<sup>11)</sup>。また、保健関係者やプロテスタントへの改宗者が強調するように、アルコール飲料の消費量の多さはSMの深刻な社会問題といえる。

## 2. メキシコ市のオトミー移住者と援助活動

前節で紹介したSMのオトミーにとって、最も重要な移住先は、所要4時間のバスが一時間おきに発着するメキシコ市である。16の行政区からなる首都の連邦区とメキシコ州の隣接郡・市から構成される同市は、農村からの移住者を吸収しつつ世界有数の大都市となった。移住者の流入により、2000年にメキシコ市(首都圏)に住む先住民は、全国先住民の5.1%を占める308,421人に達した(INEGI 2001)。彼らメキシコ市に住む先住民移住者は、出身コミュニティの性質と移住時期に応じて多様性を示す。メキシコ市の先住民移住者の中で援助関係者とメディアの注目を特に集めるエスニック集団は、メキシコ州出身のマサウア(mazahua)、オアハカ州低地部出身のトリキ(triqui)、およびSM出身のオトミーである。1960~70年代以降に出身コミュニティの貧困を背景に多数移住するようになった彼らは、露天商・行商や民芸品製作—オトミーの場合は物乞いも含む—などのインフォーマルな生業に従事することに加え、しばしば

空地や空き家を不法に占拠し、家族や同郷者と集住するからである<sup>12)</sup>。

農村コミュニティの先住民の場合とは異なり、都市の先住民は最近まで援助の対象とは認識されてこなかった。その理由として、「先住民問題は農村に存する」という考え(Aguirre-Beltrán 1991:99,278)が知識人や政策担当者の中で根強かったことに加え、援助主体にとって都市の先住民に援助を行うのは難しいという実情を指摘できる。都市の先住民は、農村と比べ分散しており、かつ居住年数が増すにつれ都市の生活に適応していく。

ところが、高級ホテルの前で物乞いするオトミー女性のように先住民移住者の貧困が顕在化し、さらに先住民運動の影響力が高まるにつれ、都市でも先住民を対象とする政策プログラムが出現するようになる。1990年代のメキシコ市では、先住民移住者を援助する政府機関とNGOが増えていく。援助の主たる受益者は、特定の空間に集住する先住民ないし集住していなくても組織を形成している先住民である。不法占拠地に住む上、路上での児童労働や物乞い、アルコール依存など、「都市住民の憐れむような問題群」を抱えるがゆえに、オトミー移住者は格好の援助対象となる。

メキシコ市の先住民への援助政策の画期をなしたのは、1989年における全国先住民庁(Instituto Nacional Indigenista, INI)の首都圏局の設立である。INIは、小規模融資などのプロジェクトに着手するにあたり、市民団体(Asociación Civil)の体裁を整えるなど、受益者が組織を結成することを促す。組織化を進めることにより、受益先住民の自己決定の幅を広げることを目指した(INI 1994:177)。これは、政府の先住民政策の新しい方針を示すと同時に、組織化されないかぎり先住民として支援しにくいという援助主体側の事情も反映していた。受益者の組織化を善しとする姿勢は、すべてではないにせよ、INIに限らず多くの援助主体の間にみられる。INI首都圏局の設立の他に政策環境面に生じた重要な変化として、97年12月における左派政党民主革命党(PRD)の連邦区知事の誕生を挙げることができる。それまで大統領に指名されてきた連邦区知事を投票で決する最初の選挙において、PRD党首のカルデナス候補が勝利



した。カルデナスは、歴代の制度的革命党(PRI)政権とは異なり、先住民への関与を明確に打ち出している。先住民をメキシコ市に住む主体として政府が認識したことは、彼らに割り当てられる予算が限られているとはいえ、質的な変化であった<sup>13)</sup>。PRDの連邦区支部には、先住民問題委員会(Comisión de Asuntos Indigenas)が設けられるようになった。PRD系の議員や知識人の間では、EZLNによる憲法の抜本的改正を要求する運動に刺激を受けて、都市先住民の権利確立のために連邦区の法規を改正しようとの提案もなされている。「メキシコ市の先住民の間でも自治は望ましく可能である」と唱える研究者も現れている<sup>14)</sup>。

1990年代には、政府だけでなく市民社会の間でも、先住民の力になろうと試みる組織的な活動がみられるようになる。公共政策の力点の社会政策への移動、それと並行して進むNGOの活動全般の広がり、社会福祉や教育学など貧困層援助に適用可能な専門教育を受けた若者の増大(と雇用創出への需要)、国内外におけるメキシコ先住民への関心の高まり、といった要因がそれを説明する。NGOは先住民が受益者である場合、資金を調達しやすくなった。また、児童労働や人権、ジェンダー、住宅問題などに取り組むNGOにとっても、オトミーのように貧しい先住民移住者は援助の対象となりうる。教育関連の重要なNGOとして、10年以上に渡って路上で働くオトミー児童に包括的な支援を行ってきた総合的社会開発センター(Centro Interdisciplinario para el Desarrollo Social, CIDES)がある。いわゆるプロジェクト実施型のNGOではないが、低所得層の住宅獲得や先住民支援を目標に掲げる社会運動体も、都市の先住民への関与を強めるようになった。先住民移住者への主な援助実施主体は、政府機関とNGOである。だが、それら以外にも、先住民移住者の政治的動員ないし政治参加を促すのと引き換えに援助を斡旋、約束する政党のブローカー(PRIやPRD)、および「貧しい先住民」に寄付などを実践する個人の篤志家や隣人も、援助主体に含めることができる。

このように1990年代に入り、政府・非政府の援助実施主体による先住民移住

者への援助活動が出現し広がっていく<sup>15)</sup>。SM出身のオトミーは、その先住民性(=出身コミュニティとの人間関係、行動様式における連続性)と経済活動の強いインフォーマリティ(=経済活動を律する法や規範の不遵守)の結合ゆえ、多様な背景を持つメキシコ市の先住民の中で、最も多くの援助を受けるエスニック集団の一つとなった。本稿ではオトミーの不法占拠地が集中し、それゆえに援助主体の注目を集めるようになった、連邦区クアウテモック行政区のコロニア・ローマに住むオトミー移住者と援助主体の相互作用を、もっぱら論じることにする。連邦区の中心部に位置する同コロニアには、少なくとも五つの「オトミー占拠地」がある<sup>16)</sup>。100年以上の歴史を有する、中産階級の居住区である同コロニアには、空地や廃屋など占拠の候補地が多数存在する。観光客も訪れる繁華街のソナ・ロサが歩いていける距離にあるうえ、インフォーマルな商業に携わる者への原料・商品の一大供給地である旧中心街(Centro Histórico)も近いため、露天商・行商や民芸品の生産・販売、車の窓拭き、物乞いなどに従事する成員の比率の高いオトミー世帯には、「地の利」もある。加えて、中産階級の居住区を占拠していることから人目を引きやすいため、援助の対象にもなりやすいといえる。

以下では、コロニア・ローマの五つの占拠地を、古い順にA～Eと名づけることにする。占拠地Aにオトミーが住み始めたのは1988年頃のことであり、占拠地Bは1994年、Cは1992年、Dは1997年、Eは2001年である。A～Dは空地であったが、最も新しいEは廃屋であり、AやBにかつて住んでいたオトミーらが住むようになった。敷地面積による制約はあるものの、親族の呼び寄せ、高い出生率、子供の婚姻と独立、住宅支援も含む援助を受け取れるという期待、といった理由のため、各占拠地の世帯数は増えていった。2004年8月時には、Aには20世帯が、Bには20世帯、Cには45世帯、Dには18世帯、Eには16世帯が住んでいた<sup>17)</sup>。

五つの占拠地の中でBは、占拠に気づいた民間の地主が弁護士を介してオトミーに去るよう訴えてきたため、最も不安定な住環境下におかれてきた。だ

が、2000年初頭には、INIやカトリック教会系のNGOカリタス(Cáritas)、共同貯金を推進するNGO「築こう(Construyamos)」などの援助を受け、メキシコ州のチマルワカン市に2,100㎡の代替地を確保するに至った<sup>18)</sup>。面積最大であり、中央(連邦)政府の所有地であった占拠地Cでは、連邦区政府が土地を買い取った上でそこに、住宅47戸に二つの共同作業室が収まる、4階建ての建物4棟からなる集合住宅が2003年11月に完成している。当初は雨漏りに悩まされるバラック住まいであったオトミーは、3室にバス・トイレ・台所が完備した住宅を手に入れた<sup>19)</sup>。完成にこぎつけるまでCは、補助金付き集合住宅の建設を

表1 オトミー移住者への援助実施主体と援助内容(1998年8月～2004年8月)

分類	名称	援助の内容	受益者
政府	INI (Departamento del Área Metropolitana, Instituto Nacional Indigenista: 全国先住民庁首都圏局)	小規模融資、民芸品製作等の職業訓練、住宅(建設資材など)補助、法的支援、イベントやキャンペーンの開催、文化活動への資金援助、重病患者への援助など	オトミー移住者全般、特に占拠地B
政府	CATIM (Centro de Atención al Indígena Migrante: 先住民移住者支援センター)	法的支援、先住民通訳、奨学金の支給(DIFと共同)、識字教育、民芸品プロジェクト、予防接種(保健省と共同)、イベントやワークショップの開催、緊急援助など	占拠地A、C、D
政府	Delegación Cuauhtémoc (クアウテモック行政区)	食糧交換切符の支給(特にAとB)、占拠家屋用の中古建設資材の提供、イベント開催など	占拠地A～E
政府	SEP (Secretaría de Educación Pública: 公教育省)	小学生への奨学金の支給(連邦区政府と共同)、Alberto Corea小学校では午後部においてオトミー児童を優先	小学生のいる世帯
政府	DIF (Desarrollo Integral de la Familia: 家族総合開発)	小中学生への奨学金の支給、移動巡回診療(C)	小中学生のいる(一部)世帯など
政府	STPS (Secretaría de Trabajo y Provisión Social: 労働省)	奨学金付き職業訓練(CATIM、Delegaciónなど複数の政府機関との共同)など	一部世帯
政府	CONAFE (Consejo Nacional de Fomento Educativo: 国立教育促進審議会)	トロリーバスあるいはCIDES内での特別教育プログラム(資格上は普通校と同じ扱い)	CとDの一部小学生と幼稚園生
政府	INVI (Instituto de Vivienda: 住宅協会)	補助金付き集合住宅の建設	占拠地C
NGO	CIDES (Centro Interdisciplinario para el Desarrollo Social: 総合的社会開発センター)	児童への人権・ジェンダーなどのクラス、補習、昼食・学用品の提供、牛乳の配布、成人教育、学校との提携、イベントの開催、カウンセリングなど	占拠地A～E (Dでは過去に2世帯のみ参加)
NGO	Cáritas Arquidiócesis de México (カリタス)	法的支援、住宅補助、宗教活動への資金援助、民芸品製作のためのワークショップ、学用品の配布など	特に占拠地B
NGO	Fundación de Servicios Legales y Sociales para la Comunidad Indígena (先住民コミュニティのための法的・社会的サービス基金)	法的支援、識字教育、カウンセリング、民芸品プロジェクト(実施されず)など	占拠地D
NGO	Casa y Ciudad (「家と都市」)	自助建設プロジェクト(の設計)	占拠地C
NGO	UPREZ (Unión Popular Revolucionaria Emiliano Zapata: エミリアーノ・サパタ民衆革命連合)	低所得層の住宅獲得支援(社会運動)	占拠地C
NGO	Asamblea de Barrios (住民会議)	低所得層の住宅獲得支援(社会運動)	占拠地A
NGO	Constuyamos (「築こう」)、FINCOMUN (Servicios Financieros Comunitarios: コミュニティ金融サービス)	共同貯蓄の推進、小規模融資	占拠地B
NGO	Centro de Derechos Humanos, Yax-Kin (ジャスキン人権センター)	活動家や先住民リーダーとの集会、人権についての啓蒙など(政党PRDのブローカーの面もあり)	占拠地C
政党のブローカー	PRI (制度的革命党)、PRD (民主革命党)、PARM (メキシコ真正革命党)	援助機関の斡旋、不法占拠の候補地や分譲地の紹介など	占拠地A、C、D
篤志家、一部隣人、教区司祭、大学のサークルなど		食事や古着・玩具・マシン等の寄付、ワークショップの開催など	占拠地A～E (散発的な性格)

出所：筆者作成

担う連邦区政府の住宅協会(Instituto de Vivienda, INVI)、資金を一部援助したINIといった政府機関以外に、左派系の社会運動体や政党からも支援を受けてきた。このように、住宅プロジェクトの進展においては、様々な機関からの援助を受けつつ、占拠地BとCが他の占拠地に先んじている。この違いは、占拠地の地権者の性質とともに、占拠地のリーダーシップのあり様とも関連している。

表1は、筆者が確認できた範囲で、1998年8月～2004年8月の6年の間、五つの占拠地に住むオトミーに援助を実施した主体とその活動内容、受益者を示したものである。八つの政府機関と八つのNGOが載せてあるが、ほかにもPRIやPRDなどの政党のブローカーや篤志家も援助主体とみなすことができる。

援助活動は、与える便益の内容に応じて、①「(不法占拠地の住環境の改善、および合法的に宅地ないし住宅を獲得することへの支援からなる)住宅援助」、②「(路上で働く就学児童への支援や成人向け識字教育からなる)人的資本の改善」、③「(児童への奨学金や食糧交換切符などの現金ないし現物の)所得移転」、④「法的支援」、⑤「文化・コミュニケーション」の五つに分類できる。

多様な援助主体によって実施されている援助活動の評価については、紙数の制約上から控えたい。ここでは、個々の活動の中には期待した成果を収めたものもあるが、投入された援助資源と労力の量を考えるならば、援助の効率は全般に低く、依存や受益者間の内部対立など予期せぬ悪影響をもたらすことも多いことを指摘しておく。次章では、オトミー受益者組織のリーダーシップに焦点をあて、援助主体と先住民の相互作用の実態を記述し、考察を加えたい。

## II オトミー受益者組織におけるリーダーシップ

前章では、SM出身のオトミーがメキシコ市に移住し多くの援助を受けるようになった経緯を、オトミー側、援助する側双方の要因に着目しつつ、述べてみた。本節では援助活動の実際を、援助主体が結成を促した受益者組織のリー

ダーシップのあり様を通して検討することにする。

オトミー移住者を成員とする組織は1990年代に形成される。彼らの組織化に決定的な役割を果たしたのは、INIの首都圏局である。小規模融資など個人や世帯単位では成り立たないプログラムを抱えていたINIは、マサウア、オトミー、トリキら援助対象となるメキシコ市の先住民の組織化、特に彼らが(代表などの役職者と定款の定められた)市民団体の体裁を整えることを促し、そのための法的・技術的援助を与えた。不法占拠地ごとの組織の他に、エスニシティ毎の連合組織さらにはエスニシティを横断する先住民移住者の組織も結成された。オトミーの場合、INIらの助言と援助を受けて、不法占拠地に住まないオトミーも一部登録される連合組織が生まれた他、コロニア・ローマの占拠地は、歴史の浅いEを除いて市民団体として登録されている。各組織には、リーダーおよび彼の補佐役(副リーダー、会計係や書記など)がいる。2004年8月時までリーダーはいずれも男性であり、スペイン語を比較的流暢に話す。大抵の場合、同一組織内に彼を支持する複数の親族世帯を抱えている。各々の資質や経歴に応じて個性的でもある。また、A～Dの占拠地は、援助組織の補助を受けて、話し合いやプロジェクトに使われる共同作業室も備えている。政府機関やNGO、社会運動体がしばしば組織するワークショップやイベントに参加することを通じて、リーダーは、外部社会とのネットワークを築ける他、先住民運動や援助動向についての知見を得ることもできる。

INI以外にもオトミー移住者の組織化を促す援助主体は少なくないが、その中には、「政治ブローカー」とでも呼ぶべき、PRIやPRDなどの政党関係者もいた。政治ブローカーは、政治と先住民性、経済活動のインフォーマリティとを結びつける。ブローカーにとって先住民に接近し組織化を説くことの戦略的意義は、政党の傘下組織に組み込むこと、投票への呼びかけ、集会やデモ時のサクラ要員としての利用にある。ブローカーはオトミーの政治参加と引き換えに、他の宅地候補地を斡旋する、援助主体を紹介する、といった便宜をはかる。だが、ブローカーは選挙が終わると先住民から離れがちであり、しかも彼

らの援助は裏づけのない口約束であることが多かった。また、ブローカーの活動はリーダーら先住民が権利意識に芽生える契機となりうる一方、特定の政党や社会運動体に参加する者としめない者との乖離を広げ、内部対立を招く面もある。

以下では、A～Dの4占拠地における受益者組織の歴史を、リーダーシップのあり様に重点をおきつつ記述する(人物名は仮名)。リーダーの評価基準となる援助活動の中では、占拠地住民にとって重要度の高い住宅援助の進展に注目する。また、「オトミー占拠地」には住まないものの、レント・シーカーとしての性格の強いリーダーの存在も、比較の対象として紹介することにする。そこでの「レント」とは、稀少資源と権力を有する主体に対し先住民性とインフォーマリティを操作することにより生ずる、利益機会のことである。このリーダーの場合、彼が「代表」する成員世帯との関係は希薄といえる。

## 1. 占拠地A：激しい家族間対立と複数のブローカーの介入

占拠地Aでは、地権者が不満を訴える1994年頃からINIらが占拠世帯の組織化を促していく。しかし、ホセ家、パブロ家間の対立が、複数のブローカーの介入を招きつつ援助の円滑な遂行を妨げてきた。

ホセ(1961～2004年、アルコール依存と糖尿病が原因で早逝)の家族と、彼らよりもAに先に入ったパブロ(2004年8月時46歳)の家族の間には争いが絶えず、近親関係にない世帯をも巻き込んできた。ホセもパブロも、彼の世代のSM出身者では珍しくないが、就学経験はない。援助主体との関係で最初に代表として振るまったのは、3人の子ども、妻の寡婦の母、妻の弟らもAに世帯を構えるパブロだった。ホセ家も、彼の2人の子ども、母らがA内に別に世帯をもっている。両家の対立は、ペドロ家がプロテスタントの一派に改宗し、飲酒などホセらの「悪習」を批判し始めたことにより、一層根深いものとなった。

援助資金の着服といった不手際の疑いのかけられたパブロに続いて、ホセがリーダーとなる。建設労働、民芸品の製作と販売など多くの生業に励んできた

ホセは、INIの支援を受けてオトミー移住者の横断的組織を仲間と率いていた。市民団体の登録名にはAの住所がつけられたものの、ホセは、「オトミーの民芸品製作者と商人の連合」代表として振るまうことを好んだ。後者には、ホセいわく65世帯が参加しており、そこにはAには住まないがかつてホセと行動を共にした世帯も多数含まれていた。ホセは、共同作業室にて毎週ないし隔週、占拠世帯の成人と話し合いの場をもった。集会では、ホセが援助の進捗状況について話すと、パブロ家の男女がスペイン語またはオトミー語で異議を挟むという光景がよくみられた。ホセは、援助主体との交渉役を務める報酬として、週10ペソを各世帯から集めた。

ホセのリーダーシップも長くは続かなかった。連邦区政府の先住民移住者支援機関である先住民移住者支援センター(Centro de Atención al Indígena Migrante, CATIM)職員も立ち会った99年1月の集会にて、成人成員の多数決によりホセは解任され、パブロが再度リーダーに選ばれた。交代劇の裏には、ホセの身内や友人優遇への不満に乗じたパブロの根回しがあり、さらにパブロは、政党PRIのブローカーのカルロスからPRIへの参加を誘われていた。「ホセは公平でない」との疑念や不満は多くの占拠者の間に以前からあった。それが憤りへと変わった契機は、CATIMが世帯に1個ずつ簡易ベッドを配った際、ホセの世帯が三つ、娘婿マキシミーノの世帯が二つのベッドを入手したことだった。住宅用に世帯あたり隔週で50ペソを蓄える共同口座プロジェクトが動いていたものの、ホセの解任にともない口座は解約された。ホセは自分の非を一部認めつつも、「(リーダーとして)本業を犠牲にしてきたのだ」と理解を求めた。彼は5年後に亡くなるまで、パブロ率いる新組織への参加を拒み続けた。

ホセが1998～99年にかけて、PRDが与党である連邦区政府の機関と関係が密だったのに対し、パブロはPRIのブローカーに支援を仰いだ。ブローカーのカルロスは、大学で社会人類学を専攻したとの肩書きを持つマサウアである。彼は、選挙が近くなると先住民に近づき、自らが役職に就くPRIの先住民連合組織への取り込みを画策した。「先住民評議会(Consejo Indígena)メキシコ

市支部」と命名された連合組織は、PRIの農民動員組織である全国農民同盟(CNC)の下部機構をなすが、活動していないものも含め、様々な先住民組織を傘下におさめていった。カルロスは占拠地Aを何度も訪問し、これまでの政策を糾弾するとともに先住民が一つになる必要を訴えた。その際、オトミーを安心させようと、「自分は100以上の組織を束ねており、それらは政党(PRI)に従属していない」と豪語するのだった。カルロスの誘導の下、ホセの近親の4世帯を除く占拠世帯は、「先住民ナニユ同盟」という市民団体を改めて結成した。カルロスによれば、団体の登録費の相場は7,000ペソなのだが、知人の代書人に頼んだため4,500ペソの負担で済むのだった。彼は、土地を放置している所有者の権利失効手続を主張できると考え、Aの登記簿を調べている。ブローカーとして、カルロスの他に、同じマサウアであるイリネオも一時期Aに接近している。イリネオは、PRI、PRD、メキシコ真正革命党(PARM)、PRIと支持政党を目まぐるしく変えてきた。不法占拠を何度も組織したことがある。Aに住む複数のオトミーも、彼の斡旋によりAから遠くない空地や空き家に入り込んだことがあるものの、条件の悪さから後に去っている。また、彼の勧めにより、取り付け費無料のカード式公衆電話が敷地内に2台設置されている。

新リーダーのパブロとPRIという組み合わせも、ホセ以上の成果をあげることはなかった。パブロはPRIからの援助を期待したものの、連邦区では野党のPRIが先住民に振り向けうる資源は限られていた。さらにパブロの資質にも問題があった。パブロはしばらくの間、週に1度、PRI系の先住民リーダーが集う会合に出席していた。就学経験のないため字の読めないことを気かけ、数ヵ月間だが成人教育も受けている。だがパブロは、家族の厚生を第1とする点でホセよりも優れているわけではなく、その上対立を厭わぬ性格だった。現場監督を任されることもある熟練建設労働者の彼は、オトミー男性の間では高い、週1,000~1,200ペソの賃金を得ており、リーダーの仕事のためにそれを失うのを好まなかった。成員世帯の集会はやがて開かれなくなった。住宅援助に関しては、パブロは宅地だけを手に入れ家屋は自分で建設する方が安上がりで



望ましい、という立場を取る。1999年11月にはCATIMがINVIの集合住宅プロジェクトを紹介したものの、パブロらの反対により流れている。CATIMによれば、市場価格の4分の1程度の有利な物件だったという。PRI関係者はパブロに何度かメキシコ市周縁部の宅地を紹介したが、彼はその中の一つメキシコ州イスタパルーカ郡の土地を購入している。15m×10mの1区画あたり30,000ペソの元農地を家族で4区画ほど購入(分割払い)した。だが、彼ら以外の家族はAから片道2時間強、20ペソかかる同地は辺鄙だとして、話に乗らなかった。結局、パブロらも後に購入価格で売っている。

パブロへの不満が徐々に高まる中、ホセに挽回の機会が訪れる。CIDESの支援によりA内には共同作業室が2部屋設けられていたものの、小さい方の部屋はめったに利用されることがなかった。パブロはそれを、再婚した長男の新居に割り当ててしまう。ホセは約束違反だとしてパブロを叱責したが、これには大半の世帯も同調した。勢いを増したホセとパブロの対立は深まり、2000年3月にはPRIブローカーの仲裁の下、パブロ側9世帯とホセ側7世帯(1世帯は未定)とに分裂することが決まる。ホセ支持に回った者の中には、パブロの組織で会計係を務めた男性マルセロ(33歳、学歴は小学校4年)もいた。マルセロは、ホセの許可によりAに後れて入ることができた上、ホセのサッカー仲間であった。それ以降、CATIMやCIDESら援助機関が説得に努めたものの、ホセ家とパブロ家間の反目は軽減されていない。

2004年には停滞していた住宅プロジェクトが新しい展開を見せだす。ホセは生前、「住民会議(Asamblea de Barrios)」の活動家女性リディアと知り合う。1985年のメキシコ市大地震で家屋を失った住民が中心となり結成されたこの住民運動組織は、政治的にはPRD支持を掲げる。Aを訪れるようになったリディアの提案は、占拠世帯が「住民会議」に加入し、土地を政府に安く買い取らせよう、INVIが集合住宅を建設するというものである。マルセロやホセの家族はリディアに好意的だが、パブロ側は、「住民会議」は我々のほかに(オトミーと無関係の)別の20世帯を入居させるつもりだが、それはおかしい、「リ

ディアは金を集めているが領収書をきったことはない」など批判的で、リディアと働くのを拒んでいる。Aの成員の間では「まとまらないと先に進めない」、「喧嘩ばかりして狂っている」との焦りや嘆きもあるが、現在まで対立は続いている<sup>20)</sup>。

以上、占拠地Aでは家族対立に(PRIかPRDかという)政治対立が重なることで、受益者組織は満足に機能してこなかった。成員間の意見の不一致や複数の政治ブローカー的人物の介入を乗り越えてプロジェクトを進めていくだけのリーダーシップがなかった、と言うこともできるが、逆に、政治的動員も含む援助のあり様が家族間対立を深刻なものにした、とみることもできる。

## 2. 占拠地B：成員の結束と「伝統的」リーダーシップ

占拠地BではAのような対立はなく、結束が固い占拠地といえる。それに、住人の貧困や民間地主からの訴えといった要因が加わり、複数の組織から援助を受けてきた。だが同時に、アルコール依存や児童労働は、他の占拠地と比べても深刻な問題であり続けている。

Bのリーダーは、両親の世帯、結婚した兄弟ら多くの親族が同地に住むホルヘ(29歳)である。20代半ばからリーダーを務めている彼は、SMで生まれたものの、幼い頃から行商や窓拭きなど路上で働き辛酸をなめてきた。両親とも酒飲みであるが、行動力のある母親が家族を引っ張ってきた。ホルヘもシンナー吸引歴があるが、6人の弟のうち2人は薬物常習者の施設で療養している。ホルヘは小学校3年までしか通学していないものの、基礎的な識字能力は身に付けており、スポーツ新聞の読者である。人形をソナ・ロサで売る妻、4人の子と暮らしている。2004年には非オトミーの知り合いの商人から菓子露店を賃貸されるようになり、家計は上向いている。家の中での炭酸飲料の販売にも着手している。交通費などリーダーとしての職務にかかる経費が発生した場合は、成員世帯から集めるようにしている。

廃屋の残骸の残っていたBに最初に住み始めたのは、大通りの中央分離帯

上に暮らしていたオトミーの家族だったが、その中にはホルへの母の世帯も含まれていた。INIが組織形成を促した際に、ホルへが成員世帯によりリーダーに選ばれ(市民団体としては1996年に登録)、以後何度も再任されてきた。リーダーとしてホルへは、援助主体の能力を見極めた上で、利益を与える主体とは信頼関係を維持しようと努める。援助主体や運動家、地権者の代理人と交渉する、成員世帯とは共同作業場でオトミー語を混ぜながら話し合うという経験を重ねるうち、彼は政治に関心を持つようになる。数年後には、SMの村長に立候補したいとも夢見る。貧しい家庭に生まれ教育水準は低く、週末のサッカーの試合後とか祝事や年中行事の際にとことん酒を飲むホルへは、若いながらも伝統型のリーダーといえる。チマルウアカン市に代替地を確保した後の2002年には、筆者との会話の中で、「自分達(Bの占拠者)は小さいけど家を建てるだけの土地を故郷に持っている。だが資材を買う元手がないため建てられず、帰省時に泊まる場所がない。だから家の建設資金を貸す援助プログラムがあると嬉しい。建設作業は自分達がするので7,000ペソもあれば小さな家はできる」と語っている。年齢は近いものの「都市型」のリーダーといえるCのイバンとは、志向とリーダーシップにおいて隔たりをみせる。それでも、イバンとは行動をともにすることは殆どないものの、最近では元INI職員の誘いを通じてEZLNの運動に共感を示すようになり、いくつかのイベントや会合に参加している。

Bは、積もっていた瓦礫を取り除く作業中に成員が死亡する事故の発生や地主からの告発を契機に、食料品の一時差し入れや聖地巡礼への支援も含め、多くの援助を受けるようになる。とりわけ、SMを訪れたこともあるINI首都圏局職員とは良好な関係を築くようになった。INIの前局長は、AのホセやCのイバンらのオトミー・リーダーと比べて、ホルへをストリート・チルドレンのような青年期をおくるといふ逆境にもかかわらず能力ある若きリーダーと高く評価した。カリタスなどのNGOの援助を受けることができたのは、彼らの紹介を通じてである。前局長も含めINIの2職員はカリタスに転職している。

カトリックの信仰、祝い事の実施も含め成員間にまとまりがあり、2000年初頭には複数の機関の共同支援を受けつつ代替地を確保した点では、Bは先住民組織の成功例といえよう。だがその一方で、筆者の観察によればBは五つの占拠地の中でアルコール飲料とシンナーなど薬物の消費量が最も多く、かつ児童が路上にいる時間が長い。他の占拠地に比べると内部対立は穏やかといえ、2000年にはプロテスタントに改宗した4世帯が事実上追放されている。4世帯は住宅用の貯金を返却され、現在は占拠地Eに住んでいる。彼らの代わりに、残った世帯の親戚がBに入居している。オトミー児童が路上ではなく教室にいる時間を増やすよう総合的な支援を行うCIDESなど、教育や健康に関心のある援助主体の間ではホルヘは、「いい人間だが飲酒や薬物摂取には何もしない」など、問題解決に消極的なリーダーとも評されている。

ホルヘと彼を支える仲間の男性らは、Cの例などをみて、政策の風向きが自分達のような先住民に有利になっていることを察し、政府に地主からの買い取りと公的集合住宅の建設を働きかけて、Bの土地も入手することを企図している。占拠地Bの10年の歴史を眺めるとき、「都市という過酷な環境下で自分達のアイデンティティを保ちつつ、生存ニッチを確保する先住民移住者」であると同時に、「援助主体への依存」という姿も浮かんでくる。

### 3. 占拠地C：「都市型」の強力なリーダーシップ

占拠地Cの特徴は強力なリーダーシップの存在にある。リーダーのイバン(33歳)は、オトミー成員に深酒を戒めるよう説くことができ、かつ住宅プロジェクトを成功に導くだけの交渉力を持つだけでなく、先住民運動にも積極的に参加している。このように彼は「援助主体好み」のリーダーであり、メディアの取材や研究者の訪問も受けてきた。だがその反面、オトミーの間では彼の強引さや政治家のような振るまいへの不信や反発も観察される。

「異色」のリーダー、イバンは、8人兄弟の3番目(二男)としてメキシコ市に生まれる。SMに家を持つ彼の両親は、1960年代からメキシコ市に移住する

ようになった。イバンの両親は、早くから移住したことに加え、SMにおける初期の改宗者でもある。イバンと彼の兄弟はオトミーの中では学歴が高い。イバンは学齢期をSMで過ごし、隣接村の中学校を修了している。末弟はコロニア・ローマにある私立大学の経営学部2年生である。占拠地A～Eの中で大学生は彼だけである。授業料だけで年間16,000ペソと高額な学費を捻出するため、毎日路上で人形を売る母、兄弟が支えるだけでなく、末弟本人もアルバイトをしている。イバンは中学卒業後の17歳のときから、メキシコ市に生活の拠点をおいている。学業を続け医師になりたかったものの、経済状況はそれを許さなかった。メキシコ州出身の妻サラとは、2人が住んでいた集合住宅で知り合う。95年には、イバンが鍛冶工の職を失うと同時にサラも勤めていた工場を解雇された。このため彼らは、既にイバンの母も含めオトミー移住者が住んでいた占拠地Cに転居するようになる。600ペソの家賃を払う必要がなくなったものの、最初のうちは住環境の違いにとまどったという。Cには現在イバンの近親者として、母と3人の弟、1人の妹、およびメスチソ女性と家庭をもうけており集合住宅の完成に伴い転居してきた兄が、住んでいる。A、B、Dのリーダーとは異なりイバンは、オトミー語を聞き取れるものの話すことはない。妻と子ども達とはスペイン語しか使わない。3人の娘がいるが、みな小学校ないし中学校に通学している。宿題を教えるなど、両親とも子どもの教育には熱心である。イバンは、Bのホルヘ同様にサッカーが得意であり、日曜日には占拠地の仲間と出かけるものの、試合後に深酒することは少ない。このようにイバンは、メキシコ市での居住歴の長さ、教育水準の高さ、非オトミー女性との結婚など、都市的な要素を兼ね備えたオトミー移住者といえる。

オトミーの中でイバン家の生活水準は高い。ステレオ、TV、冷蔵庫、携帯電話、中古乗用車など耐久消費財は質量とも充実しており、牛肉や鶏の腿・胸肉などオトミーには高価な食材を調理に使う頻度も高い。リーダーとなって以降のイバンの家計を主に支えてきたのは、家屋内での食糧雑貨販売から得た収入、および各世帯から週に10～20ペソ徴収する協力費(cooperación)であった。

市場で休日に仕入れる食糧雑貨の販売は、イバンが不在の間は妻サラと娘達が担った。Cには(集合住宅が建設される以前に)35世帯が住んでいたため、これらを合わせると生計を賄うことができた。鍛冶工に時折励むこともあったが、イバンは定職には就かずに時間の大半をリーダー業に費やしてきた。それを可能にしたのは、主としてこれら二つの収入源だった<sup>21)</sup>。

イバンがCに入った1995年当時は飲酒と薬物摂取が顕著であり、それに伴ういざこざも絶えなかった。INI首都圏局と接触のあったオトミー男性が組織の結成とリーダーの選出を提案し、そこでイバンがリーダーに選ばれたのは1996年のことだった。彼が就任の条件として打ち出したのは、成人が深酒せずにちゃんと働くこと、および児童の通学だった。イバンいわく、彼の提案は特に女性の間で受け入れられたという。占拠地CではBやDほど飲酒は深刻な問題ではないが、それはCには改宗者が多いことに加え、イバンが泥酔や家屋外での飲酒を控えるよう訴えてきたことによる。INIの勧めと援助により、Cは市民団体として登録された。だがイバンは、INIを「何かと押し付ける者達」として嫌うようになる。1997年には組織を再編し女性も役職者に含まれるようになった。イバンは共同作業場で週1~2回、成員との会合を持つよう努めた。

イバンによれば、リーダーになった当初は政治意識に目覚めてはいなかったが、左派系の社会運動体エミリアーノ・サパタ民衆革命連合(Unión Popular Revolucionaria Emiliano Zapata, UPREZ)の活動家と1996年に知り合ったことが、覚醒のきっかけとなったという。1980年代末に創設されたUPREZは、「住民会議」と重なる部分が多いが、貧困層の組織化を通じて宅地獲得や自助建設などを進めてきた。その活動にイバンは感銘を受け、それ以降UPREZだけでなく、サパティスタ民族解放戦線(FZLN)、全国先住民会議(Congreso Nacional Indígena, CNI)といった先住民運動に関与する運動体の活動にイバンは顔を出すようになり、人脈を広げていく。さらに、CIDESや「家と都市(Casa y Ciudad)」などのプロジェクト実施型のNGOから、Cは援助を受け

るようになる。集合住宅の設計は、自助建設を技術的に支援する「家と都市」の手によるものである。加えてイバンは人類学者であり、ジャスキン人権センター(Centro de Derechos Humanos, Yax-Kin)というNGOを家族で運営するオクタビオとも知り合う。政府機関での勤務経験もあるオクタビオは、PRD連邦区支部の先住民担当部門のコーディネーターという顔も合わせ持つ。先住民移住者とPRDのパイプ役を務めるオクタビオにとって、非オトミーとの交渉力に優れネオ・サパティズムにも強い共感を示すイバンは、信頼のおける先住民リーダーとなる。イバンはこうして、左派系の社会運動体も含む非政府主体、左派政党PRDとの関係を深める一方で、INIなど政府系の援助機関を遠ざけるようになる。

占拠地Cは、連邦政府が所有する一等地の上にオトミー占拠者のため集合住宅が建設されるという稀有な事例といえる。これは主として、リーダーのイバンが、上記の主体に支えられつつ、連邦政府やINVIらと粘り強く交渉を続けたことの結果である。1996年の段階で地主の連邦政府により退去請求がでており、連邦政府だけでなく、隣人の多くもオトミーが去ることを望んだ。彼らは、政府やNGOに対し「招かれざる侵入者」を援助しないよう要請してきた。1998年4月には占拠地を灰燼にした火災が発生したが、イバンらはこれを追い出す口実として隣人が仕掛けたものとみなしている。だが火災後に実際に起きたのは、先住民占拠者の追い立てではなく、被災者となった彼らへの活発な援助であった。一部隣人も支援の輪に加わった。燃え屑は取り除かれ、アスファルトで舗装された地面に全世帯のために鉄板製の簡易家屋が無償で建設された。共同トイレ、集会所、調理場も設置された。連邦政府との関係では、1998年10月より不法占拠の罪でイバンへの逮捕請求が出ていた。連邦政府への抗議デモに参加した後の1999年6月、彼は逮捕されるが、保釈金を払いすぐに釈放された。この逮捕劇の背景には、(2000年総選挙で敗れるまで)PRIが与党の連邦政府にとって、不法に占拠した彼らの所有地の売却を求めているにもかかわらず、反PRI勢力と付き合うイバンの言動が気にいらぬことがあった。

連邦政府の反感を招いたにせよ、イバンが築いたネットワークは住宅獲得に役立つことになる。1998年よりPRDが連邦区で与党の地位を占め続けていることは、彼のネットワークの価値を高めた。PRDは先住民への積極的な支援を党の方針としている。UPREZなど支援主体の中にはPRD地方議員がいたうえ、イバン自らがオクタビオらの協力を得て、対先住民政策にも影響を与えようと試みた。イバンの説明では、先住民問題委員会設置、2002年に先住民もINVIの補助金付き集合住宅の受益集団として認められたことなどの連邦区政府の政策変更には、イバンら先住民リーダーの参加が一役買ったという。PRIが総選挙で敗れ下野する直前の2000年末、連邦政府はCの所有権を占拠者のために手放す。3年後、元の占拠世帯数よりも10以上戸数の多い集合住宅が完成した。

Cでの課題が一段落する中、イバンは(旧)占拠地のリーダーという枠を超え、「PRDのブローカー的な役割も果たす都市の先住民リーダー」へと脱皮している。Cの組織は対内用と対外用の2人のリーダーを持つよう再編され、イバンは渉外を受け持つ代表となった。イバンはPRDの先住民問題委員会の委員に名を連ねている。また彼は、自らの経験と政治家・活動家とのネットワークを生かして、コロニア・ローマ内やその周辺に住む先住民、非先住民の占拠者の住宅獲得に向けての斡旋も行っている。だが、不法占拠を組織しているとして、警察に目をつけられている。SMのために何かをしたいとの思いも膨らんでおり、現村長も含む関係者にSMへの病院建設などを働きかけている。

以上、リーダーのイバンを軸に占拠地Cの歴史を辿ってみた。援助主体やメディアの間では彼のリーダーシップを評価する者が多い。だが、オトミー内での評価はそれほどではなく、不信や敵意も見受けられる。1997年の段階でイバンを支持しない12の世帯は別行動を取る傾向にあった。2000年秋にはイバンの言動と方針に反感を持つ約半数の世帯が別のリーダーの下に分裂し、(住宅プロジェクトには参加したものの)C内には二集団が並立することになった。しかし反イバン派は、これまでにリーダーが3度変わるなどリーダーシップに



欠けた。2004年8月時には、戻った者も含め約3分の2の29世帯がイバン側についていた。それでも、同じ敷地内ながら別の棟に住む反イバン派のイバンへの不信は根強く、会合には参加しない。「支持しないと援助を受け取れなくなる」、「イバンには有力者とのコネがある」との恐れから、イバン側につく家族の多くも不満があっても表明しにくいのが実情である。C以外のオトミー移住者の間でも、あからさまに嫌う者も含め、イバンの評判はよいとはいえない。イバンが駄目との烙印を押した援助組織にも、彼を評価しない者はいる。

イバンの第一の問題点として、強力なリーダーシップの暗部ともいえるが、その権威主義的な性格を挙げることができる。自分の方針に異議を唱える者や政治観が異なる者へは、不寛容な態度を示しがちである。Bのホルヘがイバンの能力を評価するものの「彼は(先住民リーダーというけど)オトミーじゃないだろう」と批判的な視点を持つ一方、イバンはホルヘがEZLNを支持していることについて、「(元INI職員ら)まわりの人間に流されているだけだ」と評価しない。

2番目の問題点として、INIとの関係で組織化された占拠地Cは、イバンが左派系の諸勢力と結びつく中、政治化が一時、極端なまでに進んでしまう。イバンは、大学生のスト支援など先住民とは関係のないデモも含め、PRDが関与するデモへの成員世帯の参加を求めた。分裂した家族側の不満の一つは、集合住宅の建設案に彼らが不必要と考える多目的の共同作業室が含まれていることだった。イバンは、「連中は貰うことしか頭にない」とこれを一蹴したが、建設後の共同作業室の一部は、オクタビオの家族がジャスキン人権センターの事務所として利用している。共同作業室には左派系の活動家やPRD関係者、先住民リーダーらがよく訪問する。オトミーの間でイバンは、「政治家」と認識されつつある。実際、自分よりも若いSMの現村長を「青二才(verde)」と評することに窺がわれるように、イバン自身も「政治のプロ」となりつつあることを自認している。

最後に、オトミーがイバンへの不満として最もよく言及するのだが、金にま

つわる問題がある。協力費の定期的な徴収はイバンのリーダーシップを経済的に支える条件の一つだったものの、それを評価しない者には支払は理不尽に思えた。さらに、「住宅建設の経費等の名目で成員から集めた金、ないし借りた金、あるいは援助主体から受けとった金をイバンは着服しており、そのせいで贅沢な暮らしをしている」と、反イバン派の家族にかぎらず多くのオトミーは考えている。

占拠地Cを受益住民の組織としてみると、住環境の劇的な改善など援助主体が評価できる点が多々ある。それをもたらしたイバンのリーダーシップは、占拠者の中では都市的で少数派といえる彼の資質と経歴に、先住民運動にも関与する左派系の社会運動体や政治主体の支援が噛み合うことによって、生まれたといえる。だがそれゆえにこそ、より伝統的なオトミー移住者の間では彼への不信や反感が充満している。

#### 4. 占拠地D：リーダーシップの不在

占拠地DではCと対照的に、リーダーシップ不在といえる状況が続いてきた。1997年に親戚とDを占拠してからリーダー役を務めてきたルイス(39歳)は、アルコール依存症であるうえ、援助主体から短期的な便益を追求し過ぎるきらいがあった。このためルイスの親戚を除くDの居住者は、ルイスよりも能力があると思われる新リーダーのアンドレスの下に住宅獲得を目指すようになった。

SMのI区生まれのルイスは、父親が早逝したこともあり、幼い頃からメキシコ市との行き来を繰り返してきた。14歳のとき、同じくI区出身の2歳年上の妻ルーペと結婚した。ルイスは小学校の第1学年を修了することができず、ルーペには通学経験がない。結婚後、ルイスがメキシコ市にいる時間は次第に長くなっていく。11年前には5年間住んだ占拠地を火事で焼け出され、その後トラウアク行政区の補助金付き集合住宅に入居する機会を得た。だが、3年ほどで月賦払いをあきらめ、この住宅を売っている。ルイスはオトミーが従事す

る仕事は大体経験したが、この15年間は主として、ルーペと一緒にコヨアカン広場にて民芸品を売ってきた。週6日間、観光客が立ち寄る広場で露店を構えるという有利な立場にあり、ルーペは2004年8月時には民芸品販売から週2,000ペソの所得を得ていた。ルイス家は、自動車を購入しているように、オトミーの中では収入において恵まれている。だが、ルイスの飲み出すと際限のない飲酒と持病の糖尿病は家計を圧迫してきた。

ルイスはその長い移住経験を生かして、占拠地Dを率いようとした。ところが、援助主体からも占拠者からも信認を得るに至らなかった。占拠地Cとは対照的に、Dではリーダー自らが飲み仲間を探すことが酒量の多さの一因となっていた。飲酒癖に加えてルイスの言動は近視眼的であった。一例を挙げると、「基金(Fundación、正式名は先住民コミュニティのための法的社会的サービス基金 Fundación de Servicios Legales y Sociales para la Comunidad Indígena)」とルイスらが呼ぶNGOから、Dは1999年から2000年にかけて援助を受けた。創設まもない「基金」は、他の援助主体と深い関係を築いていないDへの援助をもちかけた。男性は夕刻、女性は午前中に集めて行われた成人教育、人権や保健についての講習、年末のポサーダの祝いなどが実施されたほか、民芸品の質の向上をはかるプロジェクトも提案された。だが2000年秋には大きな成果を収めることなく、「基金」はDから撤退した。民芸品プロジェクトは実現されずじまいだった。情熱はあるが現場経験の浅い若い職員が多く、説教調で語りかけるなど、「基金」側にも非はあったが、所得補填的な援助を期待するルイスが、職員と十分な意思疎通を取らなかったことも「すれ違い」の一因であった。

また、Dでは児童労働と非就学児童が目立ったが、2004年夏時点まで2世帯しかCIDESに参加したことはない。ルイスはCIDESの活動を評価しなかったし、CIDES側はDを近づきにくい占拠地とみなしていた。ルイスはCのイバン同様に、UPREZの活動家とも知り合った。チアパスを訪問したこともある。PRI、PRD、PARMなど様々な政党の党員証も持っている。PRDの関係者が、

近所の公園で行われた地方議会の候補者演説への聴衆として、Dのオトミーを動員したこともある。だがルイスは、投票など選挙前の協力を除いて社会運動や政治活動に参加する気はなかった。こうした彼の「日和見的」ともいえる姿勢は、イバンが、長期的に関与することによって、組織としても個人としても大きな利益を引き出したのと対照的である。

ルイスに援助主体との交渉を任せていた占拠者に失望感が高まっていく。Dでは立ち退きの脅威はなく、クアウテモック行政区自治体により、共同作業室も含め中古の住宅資材を与えられ、地面はアスファルトで舗装されるようになった。だが、郊外に宅地を獲得したB、集合住宅プロジェクトが進むCに比べると、Dは遅れを取っていた。成員世帯は住宅のための貯蓄として毎週50ペソをルイスに渡し、彼はそれを自分名義の口座に預けていた。しかし、この共同口座の預金残高は計算額に満たず、ルイスによる差額の使い込み疑惑を招いたため、1年8ヵ月で口座は解約された。毎週10ペソをルイスは各世帯から協力費として徴収していたが、見返りがなにかぎり支払う側には高く感じられた。こうして2001年末、占拠世帯多数の決定によって、ルイスは実質的にリーダーを解任された。

2002年2月から、ルイスに代わってリーダー役を務めるようになったのは、その1年前にDに入居したアンドレス(39歳)である。ルイスと同世代のアンドレスの経歴には、8歳で孤児のような状況におかれ小学2年の途中までしか通学していない、13歳からメキシコ市に移住する、コヨアカン広場に民芸品の露店を持つなど、ルイスと似た点が多い。だが彼はアルコール依存症ではなく、露天商組合での活動経験もある。INVIでDの住宅プロジェクトの進行状況を聞いたアンドレスによれば、ルイスの下でプロジェクトは何ら動いていなかった。彼は知り合いの弁護士に仲介を頼みつつ、Cの例に倣い、現住する18世帯に2世帯を加えた20世帯からなる集合住宅の建設に向けてINVIとの交渉を進めている。しかし、ルイスの親族6世帯に代夫関係にある2世帯を加えた8世帯は、アンドレスの権限を受け入れていない。ルイスの弟は、アンドレスか彼

が手続き代行を任せる人物のどちらかが食わせ者だと睨んでいる。

以上、占拠地 D ではリーダーシップの欠如からリーダーが解任された後、新たなリーダーは合法的な住宅の獲得手続きを進めている。だが、元のリーダーの親族は参加を拒んでおり、占拠地 A のような分裂状態に陥った<sup>22)</sup>。

先住民移住者の中には、政府機関や政党関係者とのやり取りを経て、自己利益のために資源を引き出す手段として組織の形成を繰り返す者もいる。彼らは、実体に乏しい組織を作り、資源を有する政治家、政党関係者や援助機関の間を「幽霊プロジェクト」を持って渡り歩く。こうした人物は先住民移住者のごく一部に過ぎないにせよ、先住民への援助と経済活動のインフォーマリティが彼らのようなあり様を可能にしていることは重要な論点といえる。以下では、2002年夏時点までのオトミー移住者ファンの半生を紹介する。

#### 5. 露天商ファン：援助を通じて個人の社会経済的上昇を目指す「リーダー」

1969年生まれのファンはメキシコ市で生まれ育った。オトミー語はかなり聞き取れるが、話すことはできない。両親とは死別しているが、彼は幼い頃からソナ・ロサなど路上で現金収入を得てきた。通学経験はほとんどないが、スポーツ新聞を読むことはできる。占拠地 B、C、D に親戚が何名かいて、年末など彼らと数日間続けて酒を飲むこともある。90年代後半から占拠地 C と同じ通りにある空き家に住んでいるが、隣人のメスチソに麻葉の売人がいるなど、居心地は悪かった。マサウア女性のセレーナ、彼女の2人の連れ子、および「祖母」代わりの親戚の寡婦アンヘリカと暮らしていたが、糖尿病を患っていたアンヘリカは2000年初めに亡くなっている。セレーナを手伝う2人の娘も含め、みなインフォーマルな商業に従事している。ファンが1999年にレフォルマ通りの一角で、小さいながらも露店の上に菓子を並べて売っていた際の純益は、1日100～150ペソであり、オトミー移住者の中では低くはなかった。

ファンは、経済活動のインフォーマリティおよび先住民であるという属性は、政治的に巧く振るまうことを通じて経済的利益をもたらしうることに魅力を感じ

じるようになる。彼は仲間を募り、INIやCATIM、社会開発省などの政府機関、PRI、PRD、PARMなどの政党、先住民を支援するNGOなど、援助してくれそうな機関があれば接近を試みてきた。98～99年にかけては、CATIMの援助を受けつつ、知り合いの露天商・行商約45名を集めて市民団体を結成している。組織名には「先住民の」という形容詞が付されたものの、成員には非先住民も多かった。PRIの大統領候補を決する党員の内部選挙が迫る1999年夏には、候補者の1人マドラソの選挙キャンペーンに参加した。内部選挙でマドラソがラバスティーダ候補に破れると、直ちにラバスティーダ支持に切り替えている。民芸品製作の機械購入のための小規模融資を政府機関に申請しようとしたこともあるが、融資にはこぎつけられなかった。ファンの組織成員のうち10名前後がINIに負債を負っていたことに加え、彼自身も申請プロジェクトが成功するという確信も返済するという責任も感じているように見えなかった。住宅については、レフォルマ通りに近い空地进行を1999年9月から短期間だが占拠している。続いて2000年6月には、約50世帯が参加して、連邦区南部トラルパン行政区にある民間所有の傾斜地を占拠した。ファンは占拠組織者の1人だったが、背後にはPRI系ブローカーが絡んでいた。5～6世帯のオトミーもこの占拠に参加したが、自宅を有する者もいた。この占拠は2ヵ月後、地主の告発を認めた政府により強制撤去されるという憂き目に会う。カリタスは撤去後に緊急の差し入れを行ったが、ファンのことを知るCATIMの所長は、「(地主が撤去を要請するような)占拠を支援することはできない」と彼の行動を嘆いている。

リーダー兼ブローカーとして上昇を目指すファンの努力は、思うように実を結んではいない。「親戚の多くは自分と違って家を持っている」と彼は漏らす。実利を得る見込みが薄いと感じられるとすぐに時間の無駄として新しい援助先を探す行動様式は、あまりに機会主義的で、援助主体や援助を受けるために彼が組織する仲間の信頼を勝ちとりにくかった。オトミーの間では、「奴は人を騙す」、「露店の権利を得てはそれを転売する」といった噂がよく聞かれる。

以上、援助の「窓口」として生まれた、オトミー移住者のリーダーシップの実態を検討した。占拠地Aでは、家族間対立に複数の政党ブローカーの介入が重なり、リーダーシップが発揮されることは少なかった。占拠地BとCは住宅プロジェクトにおいて大きな成果を収めており、各々のリーダーを評価する援助主体もいるが、リーダーシップのあり様は異なる。Bは「伝統型」であり、内部の結束も比較的固いが、人的資本の改善は乏しく、援助への依存傾向もみてとれる。これに対し、Cのイバンは外部社会との交渉力に優れる人物である反面、その生い立ちと振るまいは都市的であり、強引さも目立つ。左派系の政治・運動主体による支援は、イバンの地平を広げ、住人が4階建て集合住宅を獲得することを可能にした。だが、その過程で、本人は独立や不偏を説くものの政治ブローカーになりつつあり、彼のやり方を認めない家族は離反し、彼と行動を共にする家族の多くも不満を抱いている。Dでは、リーダーは援助主体からも成員世帯からも評価を得ることができず、彼の親族世帯と新たなリーダーを支持する世帯とに二分した。最後に、露天商ファンは、先住民であることと経済活動のインフォーマリティを政治的に操作、活用することを通じて自己利益の成就を目指す「リーダー」といえる。だが、その露骨さも手伝い、これまでのところ彼の個人的目標は達成されていない。

このように、個々の援助主体にとってはうまく機能しているようにみえる例も含め、オトミー受益者組織のリーダーシップは、援助主体との関係ないし受益先住民との関係において理想的な状況とは異なっている。リーダーには、政府機関やNGOが来るのを待つだけでなく、ときに彼らの事務所を訪れつつ、援助の実施にこぎつけるだけの交渉力や忍耐力などを有するほかに、成員世帯には公正に振るまうことが期待される。だが、オトミーにとって、移住者組織のリーダーとはその座をめぐる競争すべき名誉あるものではないように見える。家計との両立をやり繰りせねばならぬだけでなく、他の組織と比べて住宅プロジェクトなどの援助が滞っている、あるいは身内をあからさまに優遇していると成員がみなしたら、リーダーは解任の憂き目を見る。そうでなくても不

満を抱く家族は離反、分裂するようになる。オトミーの受益者組織は、援助主体や知識層が期待するような安定性を備えていない<sup>23)</sup>。

五つの事例以外についても、複数の居住地をまたがるオトミーの連合組織は民芸品の生産向上といった目的をほとんど達成することなく、数年で活動を停止している。1998年時点でそれは形骸化していた<sup>24)</sup>。

オトミー移住者のリーダーシップが直面する困難の理由を、援助する側、される側の双方の事情に目を配りつつ、考察してみたい。

第一に、リーダーシップの性質に関しては、それが援助主体の存在とイニシアチブなしには存在しえなかったであろう点において、「トップ・ダウン」型といえる。ここで、たとえ「トップ・ダウン」型であっても、リーダーを介することにより援助活動がオトミー受益者の福祉の向上に役立てばよいのだが、援助主体の先入観、自己利益および援助の方法論はその実現を妨げがちである。

代表のいる市民団体としての登録など、援助主体によるオトミーの組織化は、オトミーにとってそれが最善であるという熟慮の下になされたとはいえない。先住民には共同行動の伝統があるといったイメージや、組織化しないと援助しにくいという援助する側の都合により、進められた面が強かった。人類学者のヒラバヤシ(Hirabayashi 1986)は、複数のコミュニティ出身のミステコとサポテコ移住者の比較検討を通じて、移住先で同郷者会(Migrant Village Association)が形成される条件を論じている。その中で彼は、「政治化(politicization)」の契機を重視している。SMのオトミーは、そのインフォーマリティに加え「都市の先住民(オトミー)」であることにより援助受益者となりうるという点で、先住民移住者の中でも「政治化」の条件が整っていた<sup>25)</sup>。だが、援助機関の直接的関与という、内発的とはいえない「政治化」により生まれたオトミーの組織は脆さを内包している。オトミーは、異なる家族が弾力的に結びついた先住民社会であり、多くの援助主体が想定するような強い共同行動の伝統を有しているわけではない。同じ占拠地に暮らしオトミー語で意思疎通することは、個人的利害や「面倒なことは人に任せたい」という心情を超



えて、異なる家族が共通の目標に向けて協調行動を取ることを必ずしも意味しない。それはむしろ、経験を通じて学んでいくものである。占拠地Bなどではこうした学習の効果がみられるものの、A、C、Dが分裂したように、オトミー受益者の組織化は成員家族の団結には必ずしも結びついていない。様々な援助実施主体の存在は、受益者組織を発散させる方向に作用しうる。特に政治ブローカーは、先住民リーダーに政党の利益確保も「依頼」という点で、リーダーシップを歪めうる。

リーダーシップのあり様への影響に限定されないものの、援助活動の慈善性も援助の実態の説明において考慮すべき要因である。オトミー移住者への援助においては、受益者は何ら代価を払う必要がないか、参加の機会費用を払うのみ(奨学金や現物支給、成人教育や法的支援など)、そうでなくても補助で賄われる(住宅プロジェクトなど)という意味で、慈善性が顕著といえる。これは所得補填、所得再分配という観点からは評価しうる一方、受益者の援助への依存や内部対立をもたらしうる<sup>26)</sup>。依存については、成員の結束が比較的固い占拠地Bで人的資本の改善が低く留まっていることや、援助を通じて自己利益の獲得を追求する露天商ファンの行動にみてとれる。援助資源は有限のため、全員が受益者とならない援助の場合、非受益者との間に妬みや反目といった内部対立を生みやすい。占拠地Aのホセ家とパブロ家の対立は、彼らが援助をめぐる政治に巻き込まれなかったなら、かくも深いものとはならなかったであろう。

第二に、オトミー移住者のおかれた条件では、リーダーに求められる能力のハードルの高さを挙げることができる。五つの事例の中で占拠地Cのイバンは、都市での生活が長く教育水準が高い(中学校卒)ことも手伝い、外部の援助主体との関係では能力あるリーダーとみなすことができる。だが、「先住民リーダー」としての彼の存在を正当化するオトミーとの関係では、成員世帯の広い信頼を得ているとはいえない。居住者が集合住宅を入手した現在、彼のエネルギーは政党や社会運動体など彼を評価する外部主体の活動への参加に注がれている。援助主体の信認を得る能力と同時に、同郷の先住民と連帯するという、

相矛盾しうる特性を持つことが、リーダーに期待されている。

第三に、貧困世帯に属するオトミーにリーダーとしての仕事への報酬が保障されていないことも指摘せねばならない。オトミー内では、リーダーは「協力費」の成員からの徴収、自分の仕事の内容や労働時間の調整(自営業など)、親族や友人ら信頼できる成員の協力要請など、負担を減らそうと工夫している。だが、リーダー業に時間を割くほど、本業は疎かになる。自分の親族に援助資源を多く回すことによって、機会費用を相殺したり、それを上回る利益を得ようとしたりすると、非親族世帯から非難を浴びる可能性が高い。Cのイバンは、協力費の徴収と占拠地内での雑貨売りに加え、最近では政党関係の仕事や不法占拠の斡旋からも報酬を得ているが、イバンのあり方に批判的な家族の多いことは先述の通りである。露天商ファンは、援助過程の綻びや曖昧さから利益を得ようとする姿勢が目立つゆえに、彼のことを知る援助主体やオトミーからは信頼を勝ちとれないでいる。

もはや活動していないオトミー移住者の連合組織の例では、調整役を務める複数のリーダー格の男性がいたが、その中の2人は「リーダーは時間を喰われる割に報われない」と漏らしている。1人は、現在トラウアク行政区にある補助金付き集合住宅に住む自転車タクシーの運転業を営む男性である。もう1人は、低所得層居住区サント・ドミンゴに占拠を経て自宅を持ち、コヨアカン広場に民芸品の露店を構える男性である。両者ともリーダーの経済的負担を指摘するが、後者の場合はそれに加えて援助資金を着服した疑いをかけられている。

### Ⅲ 結語

メキシコを含む多くのラテンアメリカ諸国では、先住民と外部社会との関係をいかに改善していくかが、重要な社会的争点となっている。本稿では、メキシコ市のオトミー移住者と彼らへの援助の実施主体との相互作用において、両者を結びつけるリーダーシップの役割に焦点をあてた。リーダーシップに着目

しつつ、様々な援助を受けるようになった先住民社会の変容と課題を分析する作業には、援助の功罪を見極め、改善案を提起しうるだけでなく、研究者や援助サークルの関心、利害から語られがちな昨今の先住民をめぐる議論に一石を投じうるという点で意義がある。

援助過程における先住民リーダーとは、外部の援助主体と先住民受益者の「二重の代理」という難しい役割を演じる者、と捉えることができる。ケレタロ州SM出身のオトミー移住者の場合、その先住民性と経済活動のインフォーマリティゆえに、1990年代以降に多数の援助実施主体の注目を集めることになった。オトミーのリーダーは、受益者の組織形成を促す援助活動の産物であり、その意味でリーダーシップは、「トップ・ダウン」型といえる。そこでのリーダーシップは、占拠地BやCにおけるように学習を通じた改善もみられる一方、内部対立や援助依存の兆候、あるいはリーダーの政治ブローカー化など、「二重の代理」の理想的状況とは隔たっている。その理由として、1) 援助主体の先入観と自己利益および援助の慈善性がもたらす悪影響という援助主体側の要因、2) オトミーの低い教育水準などと比べリーダーに求められる能力の高さ、3) リーダーの報酬が定まっていないこと、という三点を指摘した。

最後に、本稿の政策含意を述べてみたい。援助の実施主体には、受益先住民が直面する制約条件と、そのもとで彼らがとる適応戦略とを理解したうえで、受益者が個人としておよび集団としての能力を高めるような性質の援助を行うことが求められる<sup>27)</sup>。そのためには、援助主体は自分達の専門知識に基いた援助計画を作成する前に、情報収集と利害関係の分析に努めねばならない。受益者が昨今注目を集め、「援助慣れ」もまみられる先住民の場合、先入観を懐く援助する側とされる側とのずれは、大きくなりがちである。オトミー移住者の場合、援助主体が早急に受益者の組織化を進めることや慈善性の顕著な援助を行うことは、負の影響を伴った。また、政党のブローカーも含め複数の援助主体がいることは、受益者の選択肢の拡大をもたらす面がある一方で、援助の非効率性や受益者内の対立を招きうる。異なる援助主体の間で、情報や経験の

共有も含め協調を深めていくことが必要だろう。

リーダーシップに関しては、占拠地Cのイバンのような強力かつ「都市型」のリーダーシップと、Bのホルへのような「伝統型」のリーダーシップの長所が合わさったとき、先住民受益者の組織は有効に機能するだろう。リーダーとその側近に任せきり、ないしリーダーを自分好みに仕立てるといった姿勢を援助主体がとるかぎり、優れたリーダーシップは育まれない。特に受益者の組織化を重視する場合にあてはまるのだが、援助主体が、仲介にたつ先住民の特徴はもちろん、彼らの動機付け、広義の報酬に無頓着でいることも許されない。

#### 注釈

- 1) 「文化的自由」を主題とした『2004年人間開発報告』は、文化的自由を奪われがちであり公共行動を通じての状況改善が望まれる人々として、(多民族社会における)少数民族と移民に並んで、先住民を挙げている(UNDP 2004)。本稿では援助活動を、「政府ないし非政府の外部主体によって、受益者として選ばれた人々の利益の増進や選択肢の拡大を目的に実施される、非営利の多様な活動(プロジェクトなど)の総体」と定義する。政府による社会政策も援助活動に含めることにする。
- 2) 本稿ではリーダーシップを、「ある集団(ないし組織)を代表して特定の役割を果たすことが期待される人物と、その人物が属する集団(組織)および外部の集団(組織)との関係性」と定義する。関係性に影響を与えるリーダーの特質や能力にも注目する。
- 3) 援助に「依頼人-代理人」モデルを適用した代表的な先行研究に、マーティンスらによる国際援助の研究がある。それによれば、公的活動の中でも援助はとりわけ、利害関係者間での利害の不一致や情報の非対称性という問題につきまといがちである。援助が援助する側の期待を達成することの少ない理由は、1) 活動の目標(成長や人間開発など)および依頼者(ドナー)が複数でありうること(multiple objectives and principals)、2) 受益者がドナーではなく(ドナーが知らない人々であり「声」をあげる機会も限られている)途上国の貧困層であること(a broken feedback loop)、という二つの事情に由来する。イースタリー(Easterly 2006)の名著、特に第5章を参照のこと。本稿は、援助過程を「依頼人-代理人」関係の連鎖としてみる視点を共有するが、数理モデルを展開する理論的な研究ではなく、援助の具体的現場の比較検討から政策含意を導こうとする実証研究である。また本稿では、援助ドナーと実施主体間の関係よりも、実施主体と(リーダーおよび非リーダーからなる)受益者間の関係の考察に重点をおく。

- 4) 本稿の一次資料は、1998年8月から2006年9月まで、延べ2年半以上に及ぶ現地調査を通じて収集した。
- 5) 『2000年人口センサス』によると、メキシコで何らかの先住民言語を話す者は604万人であり、5歳以上人口の7.1%を占めた (INEGI 2001)。
- 6) メキシコ先住民の歴史と経済、生活水準、および先住民運動の拡がりや広義の援助活動については、Aguirre-Beltrán(1991)、INEGI(1995)、INI(2000)、受田・久松(2001)、Warman(2003)を参照のこと。
- 7) 『1995年全国人口調査』によると、住民数10万人以上の集落(localidades)居住者の比率は、15歳以上の非先住民成人では過半の52.0%であった一方、先住民成人の場合は11.8%だった(INEGI 1996)。非先住民に比べると割合は顕著に低いといえ、1割以上の先住民が都市部に住むようになったことは、注目に値する。都市部で特に大きなものとなる言語による定義の不十分さ、および季節移住者が数えられていないことを考慮するならば、都市の先住民のプレゼンスは11.8%を上回るだろう。
- 8) 2000年、メキシコ先住民の4.8%相当の291,722人がオトミー語を話した(INEGI 2001)。
- 9) 『人口センサス』では、1900～40年までは、1,500～2,000人の範囲にとどまっていたSMの住民数は、50年2,576人、60年3,092人、70年4,620人、80年7,199人、90年8,625人、2000年10,042人と増加していった(INEGIの *El Archivo Histórico de Localidades* (<http://mapserver.inegi.gob.mx/dsist/ahl2003/>)より筆者算出)。
- 10) 先住民政策(políticas indigenistas)は、メキシコ革命から20世紀中葉にかけて徐々に制度化されていった先住民を対象とする公共政策のことを指す。初期には初等教育の普及や農業技術の普及、法的支援などを通じた先住民の国民統合が目標とされたが、近年では多文化主義社会の実現に力点が移動している。後述の全国先住民庁(INI)は1948年に創設された連邦政府機関で、他省庁と連携しつつ先住民政策の遂行を担ってきた。1972年、SMが属するケレタロ州アmealco(Amealco de Bonfil)郡にINI先住民政策センター(Centro Coordinador Indigenista)が設立され、同郡のオトミーへの先住民政策が実施されるようになった。2003年、INIは全国先住民開発委員会(Comisión Nacional para el Desarrollo de los Pueblos Indígenas)へと改組された。
- 11) 『1990年センサス』によれば、SMにおける15歳以上人口の中で、教育を受けていない者は57.4%、小学校未修了者は28.8%、小学校修了者は6.9%、それ以上の教育を有する者は6.9%だった。同年の先住民の全国平均はそれぞれ、37.0%、32.7%、13.8%、12.3%で、SMの教育水準は先住民平均を下回っている(INEGI 1992;1993)。受田(2006)は、内部格差を伴いつつ進んだ、SMにおける学校教育の普及過程と残された課題とを論じている。
- 12) メキシコ市のオトミー移住者の社会経済状況と適応戦略については、Arizpe(1979)

ならびに Ukeda(2001)を参照のこと。

- 13) 連邦区の先住民の多くが貧困下にあることに加え、PRDは党として先住民運動を擁護してきた。そのことから、新左派政府は、司法、教育、保健などにかかわる連邦区政府の諸機関における先住民の抱える問題の特殊性への配慮、先住民の権利を社会に根付かせるための催しやキャンペーンの実施、さらには先住民移住者および元々連邦区に住んでいた先住民を援助する専門機関の創設など、先住民を積極的に支援する姿勢を示す。先住民移住者を専門に支援する機関として、先住民移住者支援センター(CATIM)が創設された。
- 14) メキシコ市の先住民をとりまく環境と制度上の変化、彼らの要求、彼らへの広義の援助活動を紹介した最近の文献として、Yanes, Molina, González coord. (2004)がある。
- 15) SM出身のオトミーの場合、1970年代という早い段階で地方政府による援助の試みがあった。時の連邦区政府は、民族衣装を纏い路上でガム売りや物乞いにいそしむオトミー女性のために、オトミー・センターを設けた。同センターへの参加女性は、託児所や診療所、食堂、シャワー、証明書の発行などのサービスを提供された他、民芸品(人形やテーブルクロス)の製作技術を学んだ。オトミー・センターは1980年代半ばにその10年強の歴史を閉じるものの、身に付けた技能は非参加者にも世代を超えて伝達され、民芸品の生産と販売はオトミー移住者の重要な所得源泉の一つとなっている。
- 16) これらの他に、筆者のまだ調査していない占拠地(廃屋)も出現している。
- 17) 2004年8月時の筆者の家計調査結果に基づく。
- 18) 代替地の購入に際し、援助組織が貸与したほか地主側も負担している。各世帯の必要支払額は25,000ペソで、2005年2月に支払を完了した。建築資材の購入資金の不足、(代替地が)地下鉄とバスを乗り継ぎ1時間半を要することなどから、人々はBに住み続けている。
- 19) 当地の地価を考慮すれば割安とはいえ、入居世帯は30年に渡って月賦を払わねばならない。支払額は各世帯の経済力を斟酌して定められている。
- 20) 2006年9月時、ホセの家族らのグループとパブロのグループのほか、パブロのグループに属していたが彼のリーダーシップに不満を抱いた女性エバが率いるグループの三グループがA内にあった。ホセの家族らのグループはPRD関連のデモや集会にしばしば参加した。
- 21) 集合住宅の完成した現在、イバンは占拠地CのリーダーというよりはPRD系の先住民活動家となっている。イバンは、2004年8月時に鍛冶工の仕事から週2,000ペソの所得を得ていると答えているが、その大半は、PRDからの報酬ないし住宅の占拠を斡旋する手数料と思われる。また、イバン家は移転所得として、年間計9,700ペソの奨学金を受けていた。

- 22) 2006年3月時、アンドレスと彼の知人も成員世帯の信頼を失い、ルイスの弟とアンドレスのグループに参加していた男性の2人が、INVIとの調整を主に担うようになっていた。
- 23) 社会的ネットワークという観点からは、リーダー(仲介者)の権限は資源を有する外部主体とのネットワークを独占しているときに確固たるものとなる(de Nooy, Mrvar and Batagelj 2005)。だが、援助主体が一般に非リーダーとの意思疎通も拒まないこと、および援助主体が複数存在することから、不満を持つオトミーはリーダーを介さずにネットワークにアクセスすることも可能である。
- 24) INIが結成を促したオトミーとマサウア、トリキからなる先住民移住者の連合組織に関しても、政治的に活発なトリキ移住者の内部対立といった要因のため、ほどなく解消している。ただし、占拠地CのイバンがかかわるPRD系の都市先住民のネットワークやBのホルヘが参加するEZLN支援のネットワークなど、リーダー・レベルでの交流が主であるものの、エスニシティ横断的な活動もみられる。
- 25) Hirabayashi (1986:20) は、同郷者会の存否を説明する一〇条件を挙げる。出身農村側の条件として、1) エスニックないし地方アイデンティティの強弱、2) 農村の低開発の度合、3) 政治的分権化の進展度、4) 土地に対する外的脅威の有無、5) 農村開発に移住者が参加することを農村が受け入れるか否かの五つ、移住先での条件として、6) 出身地との距離、7) 移住者の数、8) 個々の移住者の経済的・政治的利害、9) 相互の助け合い、守り合いを必要足らしめる過酷な都市環境、10) 政府の開発戦略が先住民であることに特典を与えているか否かの五つがある。この中、2)、3)、4)、8)、9)、10) の六つは「政治化」を促す条件であると指摘している。オトミー移住者の場合、8) ~10)、特に10) が組織形成を説明する重要な要因である。
- 26) 依存に関しては、援助の実施主体、受益者ともにそれを問題視していないのであれば、本稿でいうリーダーシップの機能の評価とはかかわりない、と考えることもできる。だが、その場合でも、(実情を知り得ない)援助ドナーとの関係では問題を孕むことになるだろう。
- 27) 援助のドナーと実施主体間の関係については、実現は容易ではないが、援助活動の目標の絞込み、実施主体の貢献や援助の効率を分かりやすく示した評価報告の作成、政党の利益増進と援助活動の分離などが課題となるだろう。

文献

Aguirre-Beltrán, Gonzalo

- 1991 *Regiones de refugio: El desarrollo de la comunidad y el proceso dominical en Mestizoamérica*. FCE.

Arizpe, Lourdes

- 1979 *Indígenas en la ciudad de México: El caso de las "Marías"*. SEPSETENTAS.

de Nooy, Wouter, Andrej Mrvar and Vladimir Batagelj

- 2005 *Exploratory Social Network Analysis with Pajek*. Cambridge Univ. Press.

Easterly, William

- 2006 *The White Man's Burden: Why the West's Efforts to Aid the Rest Have Done So Much Ill and So Little Good*. Penguin Press.

Favre, Henri

- 1998 *El indigenismo*. FCE.

Hirabayashi, Lane R.

- 1986 "The Migrant Village Association in Latin America: A Comparative Analysis," *Latin American Research Review* 21-3.

INEGI (Instituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática)

- 1992 *XI Censo General de Población y Vivienda 1990*.

- 1993 *Hablantes de Lengua Indígena: XI Censo General de Población y Vivienda 1990*.

- 1995 *La población indígena mexicana, Tomo III*.

- 1996 *Conteo de Población y Vivienda 1995*.

- 2001 *XII Censo General de Población y Vivienda 2000*.

INI (Instituto Nacional Indigenista)

- 1994 *Instituto Nacional Indigenista 1989-1994*.

- 2000 *Estado del desarrollo económico y social de los pueblos indígenas de México, 2 Tomos*.

Martens, Bertin, Uwe Mummert, Peter Murrell and Paul Seabright

- 2002 *The Institutional Economics of Foreign Aid*. Cambridge Univ. Press.

Smith, Anthony D.

- 1981 *The Ethnic Revival*. Cambridge Univ. Press.

Ukeda, Hiroyuki

- 2001 "Pobreza y los pueblos indígenas: El caso de dos familias otmíes migrantes en la Ciudad de México," *Anales de Estudios Latinoamericanos*



No.21, pp. 31-60.

UNDP

2004. *Human Development Report 2004: Cultural Liberty in Today's Diverse World*.

Warman, Arturo

2003. *Los indios mexicanos en el umbral del milenio*. FCE.

Yanes, Pablo, Virginia Molina, Oscar González coord.

2004. *Ciudad, Pueblos Indígenas y Etnicidad*. Universidad de la Ciudad de México.

受田宏之

2006 「メキシコ先住民コミュニティにおける教育普及：オトミーの事例」『アジア経済』47-4.

受田宏之・久松佳彰

2001. 「先住民と稼得所得における貧困：メキシコの『1997年全国先住民地域雇用調査』の分析」『ラテンアメリカ論集』35号.

佐藤寛

2003 「参加型開発の「再検討」、佐藤寛編『参加型開発の再検討』アジア経済研究所、pp. 3-36.

2004 「住民組織化をなぜ問題にするのか」、佐藤寛編『援助と住民組織化』アジア経済研究所、pp. 3-34.

佐藤寛（編）

2005 『援助とエンパワーメントー能力開発と社会環境変化の組み合わせー』アジア経済研究所.